

- 目次
- はじめに
- 第一章 「受け入れ合い」 = 「相互浸透」の関係性と演出作品「3番テーブルの客」
  - 一節 「受け入れ合い」 = 「相互浸透」
    - 一項 中江功の「受け入れ合い」
      - 一 口に何かを含み吸収する
      - 二 「自」と「他」を意識した構図づくり
    - 二項 哲学用語「相互浸透」
  - 二節 「3番テーブルの客」における男女観
    - 一項 「3番テーブルの客」
    - 二項 演出家中江功の男女観～「3番テーブルの客」
- 第二章 記号学によって発せられるメッセージとドラマ「危険な関係」記号学のメッセージ
  - 一節 記号学のメッセージ
    - 一項 発信者のメッセージを構成する～記号行為～
    - 二項 指示のメカニズム
    - 三項 記号行為の成功と失敗
  - 二節 「危険な関係」における人間観
    - 一項 ドラマ「危険な関係」
    - 二項 演出家中江功の人間観
      - 一 口に何かを含み吸収する
        - ・コーヒー（計12回）
        - ・ガム（計15回）
        - ・煙草（計15回）
      - 二 「自」と「他」を意識した構図づくり
        - ・虹（計5回）
        - ・橋（計3回）
- 第三章 中江功代表作品「太陽は沈まない」
  - 一節 成長記「太陽は沈まない」
    - 一項 ドラマ「太陽は沈まない」
    - 二項 演出家中江功の人生観
      - 一 お好み焼き「キムチスペシャル」890円  
～真崎家の愛の形～
      - 二 語るドーナッツ ～桐野セツ～
      - 三 伊勢谷家の食事 ～つかのまの愛～
      - 四 しみわたるラムネソーダ
      - 五 桐野セツの思い ～煙草～
      - 六 その橋を越えて ～直と亜美の恋物語～
      - 七 赤いエプロンとピンクのサンダル～母への思い～
- 第四章 演出家中江功の「相互浸透」
- おわりに
- 参考文献一覧
- 巻末資料、チェックリスト・中江功演出作品一覧表

演出家中江功の「相互浸透」の美学

抜粋に際して第二章二節を大幅に割愛。一部、論文の目次を変更しています。

論文のねらいと概要（はじめにより）

一般にドラマを作法するうえで「人間の本性まで立体的に見せる方法は『葛藤』だ」とされる。「現代テレビドラマ作劇法～実感的研究・三十項～」で岡本克己は次のように述べる。

「『劇的』とは、私にとっては端的に『葛藤』である。（…中略…）劇的とは、送り手にとっては、『劇に出てくるようなありさまを客に意識させず没頭させ、緊張と感激を与える事』と言い換えなければならない。その仕組みが、私にとっては『葛藤』である。」

また河竹登志夫の「演劇概論」は、“劇”の成り立ちを次のように解説する。

「“劇”という字は“虎”と“豕”と刃物を示す“りっとう”の合成で、二匹の猛獣ないし猛獣のごとくただけしい対立者が、牙をむいて激しく戦うありさまを意味する。すなわち人間と他の何物か 運命、神、境遇、社会悪、他の人間、自分自身のうちにひそむ相反する性情などとの矛盾・対立が次第に表面にあらわれ、ぶつかり合いながら次々に行為を生み、一つの結末にいたる過程が劇的行為である」

しかし、「葛藤」がドラマを作るとしても、その魅力までをも言えるだろうか。「劇的」な瞬間、出来事に「ぶつかって」、「葛藤する様」の、ある種の興奮を、本当にドラマの魅力として語ってよいのだろうか。

私は、「ぶつかり合い」の葛藤が織り成すドラマより、その他の何物か「他」もまた、「自己」を媒介して、自覚し、認識するという「自」と「他」の相互が浸透されてゆく様こそが「ドラマ」だと思う。主人公が「劇的」に出会い「葛藤」をした時、その先に取った行動はなんなのか。泣いたり、笑ったり、怒ったり、悩んだり…その末とった行動はなんなのか。私は、そこまでを知りたい。どのような形で受け入れ、「自己」と「他」が「相互」に「浸透」されていったのか。その時間（過程）こそが、そのドラマの最大の魅力になる。そして、その過程で得られたものにこそ、重要な意味があるのではないかと考える。

本論文は、最近のドラマ演出家の中でそこに成り立つ美学を描く演出家・中江功に着目する。

中江功は、1963年に東京で生まれ、88年フジテレビ入社後、第一制作部（ドラマ制作）所属。「北の国から」など番組で演出補を経験したのち、91年ヤングシナリオ

大賞受賞作品「ラブシミュレーション」で監督デビューした。フジテレビの「エース」とされ、代表作「この世界の果て」、「眠れる森」、「危険な関係」、「太陽は沈まない」(参照:中江功演出作品一覧表=巻末)をはじめとして、数多くのドラマを手掛けている。

その映像の美しさは、一つ一つの演技にまでこだわり、綿密に計算された映像を作り出している点にある。そこには、登場人物の“芯”が強く美しく描かれている。中江功のドラマに惹かれたきっかけは、彼のそういった丁寧なドラマの作りにある。そして、その映像の奥には深い意味が見てとれる。

本稿では、「相互浸透」の概念を手がかりに、まず場面設定や演出によって発せられるメッセージを汲み取る。そして、その際に用いる記号論に触れる。そのうえで研究対象である「3番テーブルの客」「危険な関係」「太陽は沈まない」をチェックリスト(参照:巻末資料=省略)を用いて調べ、分析をする。その過程で、演出家・中江功の描く「相互浸透」の美学を追いたいと思う。

## 第一章 「受け入れ合い」 = 「相互浸透」の関係性と演出作品「3番テーブルの客」

### 一項 中江功の「受け入れ合い」

ドラマの登場人物の、あらゆる社会環境、さまざまな人間関係の中に成り立つそれぞれの複雑な感情が、行き来する時、また、受け入れがたい出来事も受け入れなくてはならない時、人は「時間」というものをかけて、それを受け入れようとする。中江功は、ドラマの中で、「受け入れ合い」のシーンを描く時、「一、口に何かを含み吸収する」という場面設定と、「橋」や「物体」を使った「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」を用いる。例えば、食べ物や飲み物。口に含んでから、体内に行き渡り、血となり肉となるには「時間」がかかる。主人公が、受け入れがたいような事実を、受け入れなくてはならない時、必死で一人葛藤をする姿よりも、「他」をゆっくりと「時間」をかけて体内に吸収するかのよう、「口に含む姿」を取り入れることによって、「受け入れていく姿」を描いているのである。

また、見ていく過程で目立った「橋」。単純に、登場人物の関係図をあらわすがごとく取り入れているだけでなく、効果的に「自」と「他」を意識させる演出によって、その「橋」の向こう側にいる人間を、どのようにこちら側の人間が受け入れていくのか、理解していくのかということが提示されているのである。

## 二項 哲学用語「相互浸透」

ここで、「受け入れ合い」の意味をより明確な概念としてとらえたい。その結果、哲学用語である「相互浸透」という言葉が浮かび上がった。哲学とは、自分を模索する学問である。その上で「他者」と「自己」とは切っても切れない関係だとされている。中江功が描こうとする「受け入れ合い」の姿には、常に「自己」と「他者」が意識される。このことを念頭に哲学をみると、そういった概念において、18世紀頃のドイツ観念論とロマン主義の立場に立つ哲学者のシェリング(1775~1854)による、哲学用語の「相互浸透」が注目される。これは、「自己」と「他者」は結局、一つのことの両面に過ぎず、互いに持ちつ持たれつ、交流し合い、媒介し合い、生き生きとした相互対話を原理としているというものである。

自己を追求する上で、他者の存在を意識するとき、今までなんとなく「絶対的」なもののように感じられていた「所与の自分」あるいは「一次的自己」は、実は極めて「相対的」なものに過ぎなかったということが見えてくる。「他者」は「自己」と全く別個にそれ自身の厚みと重さを持ち、それ自身の法則によって動くものである。

「自己」の側の勝手な思い込みや期待とは無関係に、「自己」の存在する以前から、あるいは「自己」が存在を止めた後も、厳然と、それ自身によって実在しているものである。「自己」は「他者」に働きかけることによって、このことを実感することができるといえる。それは、「他者」は決して「自己」の思うままに動かず、その固有の性質を良く知り、その法則に従わない限り、絶対に「自己」のいうことを聞いてはくれないからだ。つまり、その自分ではない「他者」をも認めなければならない、ということなのである。

また「自己」は「他者」がいなくては、存立することが出来ない、とも言える。そもそも「こうしたい」という発想は、「こうある」という現実を根拠として生まれる。「自己」が自分自身を実現するためには、まさに「他者」を素材とし、媒介とすることが必要となる。

一方、「他者」の立場に立って「自己」を見れば、「自己」こそ「他者」に他ならない。「他者」は「自己」を媒介として自覚され、認識されたのだから、その存立は「自己」の存在を絶対条件としていることになる。

さらに、「こうある」という現実が認識されるのは、まさに「こうありたい」という主体のはたらきかけがあってこそともいえる。

「自己」と「他者」。

この両者は、互いに持ちつ持たれつ、交流し合い、媒介し合い、生き生きとした相互対話の中で運動している。

切っても切れない関係にあり、そして結局は一つのことの両面に過ぎないのかもしれない。本論文では特に、「所与の自分」=「一次的自己」は実は極めて「他者との相対的なもの」に過ぎないという意味で「相互浸透」の概念を使っていくことにする。

## 二節 「3番テーブルの客」における男女観

ここでは、「相互浸透」の概念を、実際に中江功演出のドラマに即して具体的に見てみる。中江功が描く男女観に触れながら、短編完結ドラマ「3番テーブルの客」における「一、口に何かを含み吸収する」と「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」の演出を検証したい。

### 一項「3番テーブルの客」の企画意図とあらすじ

「3番テーブルの客」は一本の脚本を二十四人の演出家がそれぞれのスタイルで演出するひとつの実験番組だった。演出家のカラーを引き出すことが番組の制作意図となっている。

脚本は、三谷幸喜がこの企画意図をうけて故意に「幅広い解釈ができるように」作った。

まず、そのストーリーを紹介する。ある夜、客もまばらなレストランに、化粧気のない地味な女が入ってくる。女はその店のウエイターの別れた妻だった。男は、妻に嘘をつく。自分はウエイターではなく、店の向かいにあるホールで行われるコンサートのパンマスをしていると。二人は昔、コンビのミュージシャンとして、メジャーになることを目指していた。しかし、男は女と別れた後で音楽の道をあきらめ、今はウエイターとして生計を立てている。妻はアルバイトをして生活しているという。男は嘘を突き通そうとするが、同僚の店員や客から声をかけられて、自分を取り繕うのに必死になる。そこへ、コンサートの大物ゲストのアンドリュー堺までやってくる。それでもなんとか嘘を突き通して、やがて別れの時が訪れる。男は、「今度ショーの方にも見に来いよ」「CD出たらおくるよ」と言って妻を見送る。女はその言葉に「必ず行くわ」と答える。...だが実は妻こそが、男が嘘の核心にしていたコンサートの主役シンガー、「ビビ萩原」であった。

このストーリーを全24人の演出家が競作した。中江功は、その中で1996年12月23日放送の第十回を担当している。次項では実際にチェックリスト「一、口に何かを含み吸収する」「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」を用いて、中江功の「受け入れ合い」=「相互浸透」を調べることにする。

## 二項 演出家中江功の男女観 ～「3番テーブルの客」～

まずはじめに「一、口に何かを含み吸収する」映像がとらえられているシーンに触れながら、「相互浸透」を紹介したい。

まず、「二人の再会」のシーンがそうである。女(黒田福美)が店に客としてやってくる。

女は最初、男に気付かず「レモンティー」を頼んで、コート、帽子、手袋を取って席に落ちつく。ウェイターである男は、その一つ一つの仕草に見覚えがある。そのことで、女が別れた妻であることに気づく。次のシーンで二人が昔一緒に出したレコードが映し出される。レコードジャケットに写った妻は、赤いマニキュアをつけている。目の前のレモンティーを口にした女も同じ赤いマニキュアをつけている。そこで、男は女を妻だと確信するのである。[映像1]そのシーンで女は「レモンティー」を口にします。ここでは、マニキュアの提示だけではなく、彼女自身のなんらかの想いを感じさせるシーンにもなっている。



[映像1] レモンティーを口にする女

また、店の客が皆帰った後、今をときめくビビ萩原が昔の妻だったことを知る。その後、閉じた店の一席につき、煙草を口に含む男(ベンガル)[映像2]がとらえられている。これは、事実を受け入れようとしているシーンである。自分のつき続ける嘘に触れず、男のプライドを守ってくれた女の気持ち。今まで過ごしてきた自分の道。そして、想像する女の歩んできた道。さまざまな思いがめぐる中で、「煙草」を含みながら、徐々に現実を、女を受け入れようとしている。

その他のシーンでは、食べ物や飲み物を口にすることが描かれることはない。バンドのコーラスの三人組も飲み物をオーダーし、サンタクロースの格好をした中年客も酒を追加するが、実際に口に含むシーンまでは映していないのである。この物語の最大の焦点は、男と女である。彼らがお互いに内在させている思いや、現実を受けとめようとしていることを示唆するときのみ、「一、口に何かを含み吸収する」場面が描かれているのである。



[映像2] 煙草を含み事実を受け入れる男

次に「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」を検証していきたいと思う。

物語も終盤に差しかかった、「二人の別れ」のシーンである。ビビ萩原のコンサートにゲスト出演するアンドリュー堺(岡田真澄)がやってくるが、女はアンドリューに、紙ナプキンに「話を合わせて」と書いてそっと手渡す。それを見てアンドリューも男の嘘につきあう。男は何も知らずにうまくごまかせたと思っている。女も、現在はバイト生活をしていて歌手の道をさっぱり諦めたという嘘につき通す。別れ際に、男は「今度ショーの方にも見に来いよ」「CD出たらおくるよ」と女を見送る。女は「必ず行くわ」と答える。二人は店にディスプレイされているクリスマスツリーをはさんで立つ。「元気でな」「あなたも」という言葉を交わす。[映像3]



[映像3] 二人別れのシーン

ここでは「クリスマスツリー」をはさんで、あえて「自」と「他」を分けた事により、元妻の手前、プライドから嘘をついた男と、その男のプライドを守るために嘘をつき通した女との時間と気持ちの距離感などを意識した構図になっている。またこの構図により、今後、元妻がビビ萩原だと男が気付く展開や、それを受けて元妻の取る行動は何なのか...といったように、今後の展開に「期待」と「予感」を感じさせる。

ラストでは、中江功演出ならではのオリジナルのエピソードが三谷脚本に加えられている。

女は、アンドリュー堺に「明日から素顔に戻るわ」と

宣言する。そこには、歌手生命を断ち切る意味合いが込められていた。一方、コンサートのポスターですべてを知った男は、店を出てホールの前で女を待つ。そこへ、コンサートを終えたビビ萩原と元妻が現れる。二人は、ホールの前にディスプレイされている「クリスマスツリー」をはさんで立つ。そして女は男の方へ歩み寄る。その後、二人は肩を並べて歩み出す。新たな出発を予感させながら…。[映像4・映像5]



[映像4] 事実を受け入れた男と素顔を取り戻す女

ここでは、店で別れた時のシーンの「期待」と「予感」を感じさせる構図[映像3]と同じ作りになっている。その後、女と男はどう受け入れ合うのか。その疑問を投げかけた形から、[映像4]のシーンへと移る。そして、ツリーを飛び越えて、男の世界へ入ってきた女[映像5]が見てとれる。“素顔”を取り戻すことを願った彼女が、事実を受け入れた男の側に踏み込んだことにより、男とのこれからが示唆されている。と同時に、これは男と女が受け入れ合った瞬間でもあった。



[映像5] 素顔を手に入れた女

## 第二章 記号学によって発せられるメッセージと ドラマ「危険な関係」

### 一節 記号学のメッセージ

中江功が演出した映像からメッセージを読みとるにあたって、つまり「一、口に何かを含み吸収する」と「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」によって発せら

れる「相互浸透の美学」という意味を汲み取る際に、「記号学」について触れておかなければならない。

### 一項 発信者のメッセージを構成する ～記号行為～

「記号学とは何か」のルイ・プリエートは記号の発信者と受信者を次のように定義する。

「信号の発信者とは、信号を発信し、いわゆる『記号行為』を行う人であって、彼は何事に関して受信者へ通報し、質問し、さらに命令するために記号を送るわけだが、こうした通報、質問、命令といったものがそれぞれ、信号を用いて伝達しようとしている発信者のメッセージを構築するのである。」(参照・「記号学とは何か」)

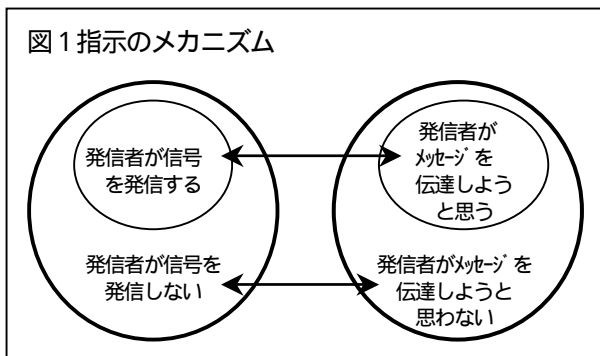
ここでいう「発信者」は「演出家中江功」であり、「受信者」は当然私達「視聴者」となる。彼がドラマの中に「一、口に何かを含み吸収する」と「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」を意図的に、そして何かを伝えたい時に、効果的に私達へメッセージとして送っているのではないだろうか、と考える。また、「映画と記号学」の浅沼圭司は、映画と観客の関係を次のように述べる。

「機械的手段による（既存の世界を視覚的・感覚的性質に）切り取り・還元の結果としての映像断片は、しかしすでに意味的である。観客が知覚する光と影、それを通じて観客が志向的に捉える具体的対象は、すでにここで『意味するもの』『意味されるもの』という二項構造が成立していると考えられる。（…中略…）視覚的形態と使用目的の概念ないし表象との間に一定の関係が成立したものをさす。形態 『意味するもの』 と目的の概念・表象 『意味されるもの』 の間の関係は、大量・反復的な使用の堆積によって生じたものである。」  
(参照・「記号としての芸術」)

つまり、そもそも映像自体がすでに意識的に切り取られている時点で、演出家の「意味するもの」をそこに反映させているわけである。中江功のドラマにおいては、特に登場人物をとりまく社会環境や人間関係、そこに生まれるそれぞれの複雑な感情が行き来する時、また、受け入れがたい出来事も受け入れなくてはならない時に強く見てとれる。つまり、「時間」をかけて受け入れようとする姿を、体内になにかを吸収する姿であらわしているといえるのである。

### 二項 指示のメカニズム

ここで、発信者がメッセージを発信しようと思う時、そこに「メッセージを伝達しようと思う」と「メッセージを伝達しようと思わない」ものが同時に兼ねられていることを考える必要がある。(図1)



つまり、中江功(発信者)が視聴者・観客にメッセージを伝えたい場合「一、口に何かを含み吸収する」「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」という「信号」を発信する。一章で取り上げた「3番テーブルの客」を例にあげるならば、途中「ビビ萩原」のコーラスの女の子三人組やサンタクローズの格好をした中年客は、飲み物を頼むが、口に含み吸収するという場面までは映していない。つまり、中江功がメッセージを伝達したくない場所では「信号」を発信していないのである。このことから、あくまで中江功が伝えようとしているメッセージは、男と女の歩みよりの過程やその姿であり、相互が浸透されてゆく様なのであるから、中江功がメッセージを伝達しようと思わない場面は、口に含み吸収するという「信号」を発信しないことによってあらわされているといつてよい。これを「指示のメカニズム」と呼ぶ。すなわち、指示するもの(発信者)の考えられる二つの可能性のうち、実現する可能性のものは信号を発信することであり、受信者には、指示内容において発信者のメッセージ伝達の意図であることがわかるのである。

### 三項 記号行為の成功と失敗

ここで改めて記号学の観点から「一、口に何かを含み吸収する」と「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」の映像について考える。すると、映像は、それが演出家の手によって切り取られているわけであるから、その記号行為はすでに「意味する」ものである。そして、視聴者・観客は「意味される」ものを見ていることになる。「信号」という「一、口に何かを含み吸収する」と「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」を伝えるべき場所で、発信することで、「受け入れ合う」「相互浸透」というメッセージを送っていることに気付かされる。

この記号行為において、記号学の世界には、成功する例と失敗する例がある。すでに見たように、発信者が記号行為を行う時にもっている意図は特定のメッセージを伝達することであり、この伝達がなされるための条件として、受信者が発信者の意図を知った後に、発信者が伝達しようとしている特定のメッセージが何であるかを認めることである。したがって、記号行為とは、発信者の伝達しようとしているメッセージと受信者が信号として読み取ったものが同一のものである時のみ成功すると言える。(参照・「記号学とは何か」)

だが、当然のことながら、記号行為はいつも成功するとは限らない。本質的には二つのタイプの失敗がある。一つは「誤解」であり、もう一つは「両義性」である。「誤解」と呼ばれるものは、「発信者が伝達しようとしているメッセージと受信者が信号に帰属させるメッセージとが、同一のものではない場合におこるもの」であり、「両義性」は「信号に帰属させられる同等の権利をもっているメッセージが二つ(またはそれ以上)あることをいい、状況によっても同じように有利にされ、許容されている他のいかなるメッセージよりも有利にされているようなメッセージがいくつもある」場合を示す。だが先の「映画と記号学」の浅沼圭司は、そういった「失敗」を芸術の側面から次のように述べる。

「深さを特質とし多様なレベルに同時に関与する芸術は、記号学的分析の対象となることによって、理念的なものとの関連を断ち切れ、一つのレベルに規定されざるをえないが、それはある意味では、芸術の本質否定、ないし、芸術観の根本的な転換を意味するものであった」(参照・「記号としての芸術」)

つまり、「意味するもの」と「意味されるもの」ここでは発信者のメッセージと受信者が読み取ったものとの関係性は、ドラマをひとつの芸術作品とみなして考えた場合、観客・視聴者に規定される。

成功の例にみたイコールでつながるような形ではなく、こと芸術的側面で見れば「意味するもの」は「意味されるもの」と目的の概念ないし表象でなければならないが、この二つの結合の根拠は、受信者の手に委ねられると言えるわけである。

記号行為の再現としては、記号学によって明確かつ実証的に把握されるが、芸術観の側面で見ると、一つの絵画をみて十人十色の解釈ができるように、描いている側は「愛」をうたっている、それに似た「平和」や「暖かさ」めいたものを受信者は感じてしまっている。この

ような差違はいたしかたないといえるのである。これは失敗の例で言う、「両義性」と似ているのだが、「失敗」とは言えないということを念頭に置いていてもらいたい。

「一、口に何かを含み吸収する」と「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」によって発せられるメッセージは、中江功氏自身が発したいと願うメッセージとは若干の差があるかもしれない。しかし、この検証を進めていくにあたって、「受け入れ合い」や「相互浸透」の美学が次第に明確になってきているのも確かだと思う。

## 二節 「危険な関係」における人間観 = 割愛

## 第三章 中江功代表演出作品「太陽は沈まない」

### 一節 成長記「太陽は沈まない」

本章では「太陽は沈まない」(フジテレビ・2000年)を通して、相互浸透を通して描かれる人間の「成長」と中江功の人生観を検証していく。

### 一項 「太陽は沈まない」のストーリーとテーマ

このドラマの主人公は、医療ミスで母親を失った高校生、真崎直(滝沢秀明)である。彼が真実を追究するため、弁護士・桐野セツ(松雪泰子)と共に様々な人間関係の中で社会や自分と戦う成長ドラマである。プロデューサーの山口雅俊は「エデンの東を滝沢くんでやりたかった」と言っており、このことから、全体的な企画が真崎直の成長記として出発していることがわかる。また、その成長の様子についてさらに具体的な見解もある。「無意識に(意味もわからずに)過ぎた時間が、時を経て意味をもってくる」(中町綾子「放送特殊研究V」講義、2000年7月12日、日本大学芸術学部)というものだ。

ドラマの冒頭では、直は反抗期の真っ只中である。気のいい母親ともうまくいっていなかった。事件後も、病院にたてついたり、騒動を起こしたり...と大人の社会のルールに則ることなく、高校生である自分の思いを優先している。桐野はそんな彼に、母親の死の真相を裁判を通して追求する限り、相手が「社会」である限り、そのルールに則って戦わなければならないとさす。桐野は、過去に自分が解決することのできなかつた裁判事件があり、依頼人が直と同じ世代の男の子で、結局、彼を救うことができなかつた思いを背負っている。

登場人物が成長していく様が、まさに「受け入れていく」姿勢となって描かれることとなる。

「太陽は沈まない」のテーマが「受け入れていく(ど

んな形であれ)」=「成長」であるために、とても効果的に、そして、見せるべきところで計算され尽くされた中江功の演出が、このドラマには見てとれる。

### 二項 演出家中江功の人生観

映像演出だけでなく、第二章一節で述べた記号論も踏まえて、キーアイテムに投影される登場人物の思いや心情変化も含めて「太陽は沈まない」を検証する。

### 一 お好み焼き「キムチスペシャル」890円

~真崎家の愛の形~

真崎家は、お好み焼き屋を営んでいる。この「キムチスペシャル」は、真崎家の母親が生前に新メニューとして考案したものである。値段は890円。ドラマのいたるところに、この「お好み焼き」「キムチスペシャル」を使ったエピソードが効果的に用いられる。ストーリーの側面から見て、まず、とてもわかりやすいのが第四話である。母親の手術にあたった病院を訴えようとしている直(滝沢秀明)だが、それは自分の彼女である伊勢谷亜美(優香)の親を訴えることと等しかった。その病院は亜美の家族が経営する病院であり、彼女の父はその外科部長である。しかし、二人は普通の恋人同士のようにいようと、お互いの両親の話はあまりせずに、うまく距離を保ちながら会っていた。しかし、やはり黙っていないのが、彼女の母(伊藤蘭)である。自分の一家を壊そうと訴訟をしている家族の子供と、一人娘を付き合わせるなど母親からすれば、当然、許し難いことだった。そして、その母がお好み焼き屋シロー(真崎家のお好み焼き屋の名前)へ娘との交際を止めるように言いに来るシーンである。直は、その場に遅れて帰宅する。彼女の母がお好み焼きを食べに来てくれたと思い、笑顔で対応する。しかし亜美の母は、お好み焼きなんて大嫌いと言い放ち、直は戸惑う。彼は、車へ乗りこむ彼女の母に包んだお好み焼きを持っていくが、そこで「あなたは彼女の父親を訴えているのよ」と言われる。そして、彼女の母は車でお好み焼きを轢いて去っていく。(映像13=省略)つぶされたお好み焼きのカットがそこにとらえられる。

これは、直自身だけでなく、お好み焼きに象徴される真崎家全てを否定するシーンであった。

続いて、受け入れる形での「お好み焼き」の描かれ方を見てみよう。第五話である。この第五話で、ようやく家族が弁護士・桐野セツ(松雪泰子)を受け入れる。それまでは、訴訟を起こすのに、商店街における店の立場や、大学受験生である直のこと、さらには勝てるかどうか

かわからない裁判の費用等問題は山積みで、家族は訴訟を起こすことに反対であった。直自身も、まだまだ反抗期であり、社会のルールに則って対応していくことが理解できず、力や気持ちに任せてことを運びがちであった。そして、そんな中、桐野セツが家族に事件の発端から、考えられる母親の死因、父親がもっとも心配する「息子（直）の納得いく答えにたどり着けるのか」といった疑問への答えなど、順を追ってゆっくりと話す。まだ事件の真相については、不確かな面が多いが、ゆっくりと丁寧に皆の気持ちを踏まえながら説明していく桐野。そんな姿に、家族も桐野を受け入れる。また直も、止めてしまった部活に再入部し、バイトや医療看護の本をやみくもに読み漁るのではなく、受験にもきちんと向かい合う。そういった、家族が桐野を受け入れる場面が、第五話の後半、父親の焼いたお好み焼きを家族と桐野が食すシーン（映像14＝省略）である。家族が桐野を受けとめたということだけでなく、病院側のミスによって、母親が死んでしまったかもしれない、という話を家族はそれぞれ皆重く受け止める。その象徴として「お好み焼き」が食された後、流しに置いてある空の皿のカットを提示することによって、家族皆も桐野自身とともに、母の痛みを受けとめたことを感じさせる。

そして、家族愛を象徴するシーンが第九話である。病院側の作戦で、妙な言いがかりや父の噂が商店街にひろまる。そんな中、直は、ひらめきで父を証言台に立たせようと言い出す。桐野は乗り気ではないが、父（尾藤イサオ）は張り切り、予行練習をくりかえす。しかし、この必死な練習もむなしく、相手側の弁護士は、父親のイメージダウンを図ろうと、みるみる一言もしゃべれなくさせてしまうほどの勢いでやりこめてしまう。父親が精神的に受けたダメージは大きく、せっかく直の大学合格祝のために焼いたお好み焼きも冷たくなるだけだった。そんな時、小学二年生の妹が「泣いちゃダメ！負けちゃダメ！」と涙をこらえて訴える。そして、「（裁判は）いつまで続くんだ...」という気力の失せた父に対して、長女の祐子（佐藤仁美）も「母さんが幸せだったことを証明するまでよ」と言う。直が黙って、ゆっくりと父の手を握る。励まし合って生きていこうと決意する家族。その意思表示を、冷めきってしまったお好み焼きを長女祐子が切り分け、三人が口に含むまでのカット（映像15＝省略）が物語る。三人が父の痛みを受け入れているのと同時に、母に対しても、また固い決意を子供達三人が示すシーンである。この出来事を経て、家族の絆、家族の愛はさらに深まる。この先、ストーリーは真相を暴く段階に入る。

「お好み焼き」自体が真崎家自体であり、また口に含むシーンを効果的に使うことによって、受け入れ合いや、拒絶されるといった姿が描かれている。また、「家族の愛の形」として象徴され、家族の絆をも強調しているとも言えるのである。

## 二 語るドーナツ ～桐野セツ～

桐野セツの「受け入れ合い」は、「ドーナツ」を食べる行為を通じて語られることが多い。彼女はよく事務所でドーナツを食べている。物語の初め、直がはじめて桐野の弁護士事務所を訪れたシーンを検証してみる。

第一話で、彼女はすでに直の母が死んだことを知っている。第二話で、直が訪れてきた時、ドーナツを食べながら話を聞いている。（映像16＝省略）それも、一生懸命噛み砕くように。直の必死の訴えを静かに聞く桐野だが、あえてドーナツを食べていることで、直の気持ちをまるで消化しているように見て取れる。こういった形で、彼女が直の気持ちや、直と付き合っている亜美の気持ちを思考している時など、ドーナツを口に含むシーンは、桐野が周りの気持ちや思いを消化しようとするところに用いられることが多い。

最も効果的に用いられているのは第四話である。ドーナツによって桐野の直に対する思いが巧みに描かれる。

直は、自分の彼女の父親がこれから訴えを起こそうとしている病院の先生だと知って苦しむ。結果的には、二人は普通の恋人同士のようにお互いの両親の話はあまりせずによろ...ということでもとまるのだが、やはり、直自身は、物語の前半でショックを隠し切れない。

また直は、第一発見者である男との接触で、相手のいい加減で横柄な態度に我慢できず殴りかかってしまう。桐野セツは、直に、重要な参考人なのだから、静かに黙って受けとめて、と説明する。そして、恋人である亜美の母親から拒絶されていることを知りさらに落ちこむ。そんな時桐野は、誕生日だから、と直にいつも自分が食べているドーナツを差し出す。それを口にす直。（映像17＝省略）そして、この回の終わりに同じようにドーナツを口にす桐野が映し出されている。（映像18＝省略）

直が桐野のあげたドーナツを口にすカットは、彼がその前に彼女に説明された、社会のルールに則って行動しなくてはならないことや、これからの亜美とのこと、そして、亜美の母親のとった行動の意味などを受け入れたシーンで描かれた。また、改めて桐野がドーナツを口に含む描写は、互いが互いを受け入れ合った姿でもあった。

直と桐野。異性であり、歳も違う。事件が起きなければ一生出会うこともなかった二人が、母の死をきっかけに、真相をともに暴こうとする。男同士なら、女同士なら話もわかりやすかったかもしれない。でも、「同士」じゃないからこそ向かい合える形もある。そのような言葉にするには難しい思いを桐野セツのドーナッツは語っているのである。

### 三 伊勢谷家の食事 ~つかのまの愛~

ここでは、食にみられる家族の違いと、いつときではあるが直が、受け入れてしまった伊勢谷家の食事を楽しむシーンを映している。

第三話の最後、直は剣道部に退部届を出し、友人とも離れ、商店街に住む近所の人々からは冷たい目を向けられる。自分のやりたいことを信じるしかない、と直は立ち向かうが、家族からも見放され孤独感を味わう。そんな時、彼は雨の中、たった一人の味方と信じる伊勢谷亜美を呼び出し、思わず抱きしめてしまう。しかし、彼女の母が、その姿を車の中から見ていた。その後、第四話では、彼女の母親が、今日で初めて最後だと娘に言いかけ、優しく直を家に迎え入れる。温かく迎えられて久しぶりに笑顔を取り戻す直。食事は、「パエリア」や「フルーツの盛り合わせ」といった、どれも上品で直にとって生まれて初めて口にしたものばかりだと喜ぶ。(映像19=省略)ここでも、あえて食事をし、直が出されるものをちゃんと口にすることを描いている。つまり、直はこのつかのまの愛を受け入れているのである。

第四話では、その後、彼女の母が直の家族に娘と別れてくれと言いに来る。そして、直が包んだお好み焼きを車で轢いて去って行くシーンが描かれる。

つかのまの愛を受け入れている時の直は、とてもけなげに見える。はじめて見る料理に素直に感動し、作り方を教えてと言う。しかし、見た目だけが華やかでつややかな料理は伊勢谷家の家族のあり方も象徴する。人情味と温かさの漂うお好み焼き屋の真崎家に比べると、伊勢谷家は代々医者 of 資産家で、見た目は華やかなのだが、実は亜美の父が看護婦と不倫をしていたり、母は家族の体裁を守ることしか頭になく、それは窮屈な生活だった。

つかのまの愛を受け入れた姿を描くと同時に、「食」にみられるその家庭の色もメッセージとなっている。

### 四 しみわたるラムネソーダ

甘酸っぱいラムネソーダのイメージから、ドラマの中でも「甘酸っぱさ」をだそうと、ラムネソーダが登場してくるシーンは多々ある。ここで、重要なポイントとし

て見ておきたいのは、第六回にでてくる、ラムネソーダの意味である。

この回では、弁護士・桐野セツ自身が深く描かれる。

彼女の前に、弁護士、池澤(鶴見辰吾)が現れる。彼は、直が訴えようとしている病院から依頼を受けていて、桐野と対立する存在である。二人は、昔恋人同士だった。池澤は、まるでそ知らぬ振りで桐野に近付き内情を知ろうとする。また直は、池澤から桐野が「見捨てた」少年の話が聞かされる。桐野は「経理部長の父親が自殺したのは会社と社長が悪い。だからそれを証明してくれ」とある少年から頼まれ、信頼されていた。しかし、結局証明できず、少年は裏切られたと感じ、自らの手で社長を殺害してしまったのだ。桐野は、直と同じ年頃の彼の気持ちを救えなかった...と涙を流して告白する。それを見た直は、弁護士という仕事が人の気持ちを背負う大変な仕事であること、また、自分自身もその誠意のもとに守られ、励まされていることを感じる。

この第六回の最後で、直は裁判に負けても勝っても桐野さんにはそばにいて欲しいと言う。弁護士である桐野は「裁判まで」ときっぱり答える。直は裁判が終わる遠い未来には、別れがあるのだとはじめて意識する。

ここで二人が海辺で、直の持ってきたラムネソーダで乾杯をするシーンが描かれる。(映像20=省略)直は桐野の持つ過去を受け入れ、また、桐野もその告白によって直を受け入れた瞬間である。二人が飲み干すシーンは美しく、なんともさわやかだ。甘酸っぱくシュワシュワと泡立てられているラムネソーダを飲む二人。その甘酸っぱい味が二人の微妙な距離をあらわしているようで、見るものの心にしみわたる。ラムネソーダが上手く使われているシーンである。

### 五 桐野セツの思い ~煙草~

桐野セツのキーアイテムとして、すでにドーナッツをあげたが、ここでもう一つ「煙草」についてあげておく。彼女はよく煙草を吸う。特に、そのシーンは彼女が自分自身だけで何かを考える時間として描かれている。誰か...といった第三者的なものではなく、自分自身に内在する思いや責任を背負い込もうとする時でもある。この煙草のシーンが脚本とも結びついて効果的にメッセージを紡ぐシーンがある。第九話の最後の方で、大学生になった直は桐野セツの煙草の量を気にして、「吸いすぎですよ」と止める。(映像21=省略)これは、単に健康を気にしているというわけではない。彼女がそれまで弁護士という立場をこえて、直自身を救おうとしてくれている気持ちに対する、直の思いやりとしてとらえることがで

きる。一人で責任や思いを背負いこまないでほしい、という思いが「吸いすぎですよ」というシーンに投影されていると言えるのではないか。

#### 六 その橋を越えて ~直と亜美の恋物語~

直と亜美が出会う場所は、ほとんどが橋の上である。

お互いの家を訪れた時や、公園、ラーメン屋、遊園地といった場面設定もあるが、特に、裁判がはじまってからは、二人は橋の上で会話をすることが多い。

たとえば、第六話でのシーンである。少しでも直の力になりたい、と亜美は病院から患者のカルテを盗み出す。その大量のカルテを桐野セツに見せようと、事務所へ向かう途中で直と出会う。そのシーンでは、橋の左手から来た亜美と右手から来た直が会話を交わす。わざわざ橋の上である必要はない。だが、直のためを思ってカルテを盗んでしまった亜美が、自分の世界から橋を越えて、直の世界に入ってくる姿を描くことによって、よりいっそう亜美の思いが色濃く表現される。(映像22 = 省略)

また、第八話のシーンである。直は、受験勉強を口実はずっと亜美を避けていた。しかし、彼女との関係をこのままにするのは良くないと思い、一度呼び出し、二人は橋の上まで歩いてくる。(映像23 = 省略)

そして、直は「好きだけど、もう会えない」と伝える。亜美は怒って「もう会わないなら好きだなんて言わないで」という。その後、歩き出した直の背中に、亜美は合格祈願のお守りを投げつけて走り去る。

まだ、二人の互いに対する想いは変わらないのだが、それぞれの家族や周りの人間のことを考えると、橋の上でしか出会うことはできない。完全にどちらかの世界にとどまって語り合える時はないのだ。

ここでもやはり、橋を越えてほんの一時をともに過ごし、またもとの場所へ戻って行ってしまふ二人…。

「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」の演出が直と亜美の恋物語の切なさを深いものとして伝えている。

#### 七 赤いエプロンとピンクのサンダル ~母への思い~

直の母の回想シーンや、家族それぞれが母親のことを連想させるとき、赤いエプロンとピンクのサンダルがでてくる。これはあきらかに母親を連想させるために使われている。その映像がしっかりととらえられている点が中江功演出の特色である。

ピンクのサンダルは、第八話で事件当時、病院で看護婦をしていた菊井(菅原禄弥)から渡される。この第八話まで、探し続けるもののみつからなかった母のサンダル。それは、子供たちが生前に母の日に送ったものだった。

(映像25 = 省略)母は、犬の散歩の時や、どこへ行くにも気に入っていたサンダルを履いていた。特別な思いが込められたサンダルとして強調されている。ここで菊井は、事件当日の詳細を知っていながら言えない立場にいる。彼女もまた、自分の妹のミスを庇うゆえに真実が言えないのだ。しかし、真崎家の皆はそれもふまえて、とりあえず母のサンダルを返してくれたことに感謝する。一つの事件を通じて、さまざまな人間の思いが交錯していることを学ぶ直は、また一つ、成長していくのである。

このことを通じて、今は亡き人との思い出の品がどんなに大切かが伝わってくる。値段は安くても、家族からのプレゼントにとてもよるこんでいた母。そして、毎日のお店に出る時は、かけていた赤いエプロン(映像24 = 省略)、物語を引き締める意味でも効果的に使われていると同時に、「もの」と「人」との関係性をあらわしていると言えるのではないだろうか。

#### 第四章 演出家中江功の「相互浸透」

これまでの、演出家中江功の映像における「相互浸透」の形をまとめてみたいと思う。

第一章では「3番テーブルの客」を使って、中江功の男女における「相互浸透」が映し出されていた、と述べた。ドラマの中では、最後、男と女はお互いを受け入れ合う形になっている。男と女の背負ってきた過去と、嘘をついてまでも大切にしかかった相手への思い。そして、それぞれの歩んできた過去と今をつなげる時間と、お互いが受け入れ合おうとする姿が生き生きと描かれている。たとえストーリーが、この男女が別々の道を歩むものであっても、きっと中江功は、お互いの思いを理解したうえで別々の道を歩まざるをえなかったという形での「受け入れ合い」を描くのではないだろうか。

また、二章で述べた「危険な関係」に見られる、中江功の人間観。これは、人間の本质を映し出す作業であった為に、演出もとても困難であったと思う。だが、「橋」や「虹」を使って受け入れ合おうとしている関係を、じっと見つめている人間を映し出したり、今まで手を染めなかった世界に引きずりこまれてしまう人間をうまく表現している。誰と、どのような関係で付き合っていくにしても、そこにはコミュニケーションという橋が必要である、という思いが込められている。

そして、前章での「太陽は沈まない」。このドラマでは登場人物が成長していく様が、まさに「受け入れていく」姿勢となってあらわされている。登場人物のあらゆる社

会環境、さまざまな人間関係の中に成り立つそれぞれの複雑な感情が行き来する時や、たとえ受け入れがたいような出来事も受け入れなくてはならない時、「時間」というものをかけて、それを受け入れようとしている。最後、事件の真実を知り、直は「どれだけの意味があったのだろう」と問う。あらゆる人達を巻き込み、真実を知りたいばかりに犠牲にしてきたこと。また、真実が暴かれたからといって、劇的な変化が訪れるわけではないこと。一体この事件を通じて、自分が何を学んだかを問う瞬間が訪れる。直はこのように述べる。「僕は、ささいな日常の中にもかけがえのない時間があることを知った」。

劇的な変化や葛藤を繰り返して悩み苦しむこと、また、大いなる喜びや、ドラマティックな恋…。そういったものだけで、人間が成長できるかといったらそうではないのである。きっかけはそこにあっても、それで終わってしまっては何も残らない。「ささいな日常」の中にこそ、成長の要素が含まれているのだ、と最後にそのことを気付けたことで直は成長できたのではないだろうか。また、中江功がそれを丁寧に描いたことにより、見ている私達にも、何が大事なのかというメッセージを投げかける。自分にとって「ささいな日常の中の、かけがえのない時間」とは何だろう、と。

「受け入れ合い」=「相互浸透」という形が、「一、口に何かを含み吸収する」という場面設定と、「橋」や「物体」を使った効果的な「二、『自』と『他』を意識した構図づくり」という演出によってあらわされていることは、これまでの代表作品によって、立証されたのではないかと思う。私達に伝えたい時に、効果的にこの演出方法でメッセージを伝えようとしていると言っていいたい。

中江功はこの方法により、「受け入れ合い」を描く。細部にわたるならば、中江功の男女間における恋愛観。「3番テーブルの客」に見られる二人が同じ道を歩んで行こうというハッピーエンディングの形と、「太陽は沈まない」に見られるようにお互いの状況や思いを理解した上で今はそれぞれの道を大事にしようという形と二つあった。結果的には、前者と後者で出来あがった形は違うものの、しかし、両者に共通して言えることは、互いの理解があってこそ成り立つ関係であるということだ。

また、「太陽は沈まない」における家族関係も「相互浸透」の姿が成長とともにあらわされている。全十一話の初め、主人公・直（滝沢秀明）は反抗期であり、社会のルールにのっとなって対応していくことが理解できず、力や気持ちに任せてことを運びがちであった。そのため自分の思いばかりが先走り、家族とも反りがなかなか合わない。しかし、回を追うにつれ、若干小学二年生の妹の気

持ちや大学生の姉の思い、父親を兄弟皆で支えていこうとする思い、そして、あんなに煙たがっていた亡き母への思い。今まで何気なく一緒に暮らしていた家族一人一人の気持ちを汲み取っていく。そういった姿を丁寧に描くことで、人の気持ちを汲み取りながら成長していく過程が浮き彫りになっていく。家族もまた一人一人の人間の集合であり、その中で交じり合う気持ちの「受け入れ合い」がこのドラマでは大切にされている。

「受け入れ合い」=「相互浸透」として汲み取られる中江功の思いは何なのか。それは、中江功自身が、視聴者である私達と常にドラマを通じて「受け入れ合っていたい」という思いからなるものかもしれない。この時代に生きる私達との「橋」をつないでいたいから。だからこのメッセージを投げかけているとも言える。それと同時に、私達にどんな形であれ受け入れ合う心を忘れないでくれ、と伝えているようにも感じる。自分の欲求を満たしたいだけに人を殺したり、自分を守るために責任をなすりつけたり。個性を持ってといわれて、間違った形で生きていこうとしている人間へのメッセージなのではないだろうか。「自」と「他」を意識したことで見えてくるものや考えなくてはならないことを忘れてはいないか、そんなメッセージを彼の演出した映像から読み取らずにはいられない。

#### 参考文献一覧

- ・河邊一外『ドラマとは何か？ストーリー工学入門』映人社、1987年
- ・岡本克己『現代テレビドラマ作劇法 実験的研究・三十項』映人社、1993年
- ・河竹登志夫『演劇概論』東京大学出版会、1978年
- ・大多亮『ヒットマン テレビで夢を売る男』角川書店、1996年
- ・川本茂雄・田島節夫・坂本百大・川野洋・磯谷孝『記号学としての芸術』頸草書房、1982年
- ・エリザベート・ヴァルター『一般記号学 パース理論の展開と応用』頸草書房、1987年
- ・ルイ・ブリエート『記号学とは何か メッセージと信号』白水社、1974年
- ・丸山圭三郎『ソシユールを読む』岩波書店、1983年

## 中江 功 主要演出作品リスト

放送年	タイトル	プロデューサー	脚本	キャスト
1992/10	二十歳の約束	大多 亮	坂元 裕二	牧瀬 里穂 稲垣 吾郎
1993/2	お願いダーリン！ (ボクたちのドラマシリーズ)		山崎 淳也	高橋由美子 森脇 健児
1993/3	ひとつ屋根の下(1)	大多 亮	野島 伸司	江口 洋介 酒井 法子
1993/11	お願いデーモン！ (ボクたちのドラマシリーズ)	杉尾 敦弘 森谷 雄	山崎 淳也	戸田 菜穂 森脇 健児
1994/1	この世の果て	大多 亮	野島 伸司	鈴木保奈美 三上 博史
1994/7	君といた夏	亀山 千広 小岩井宏悦	北川悦吏子	筒井 道隆 いしだ壱成
1994/10	若者のすべて	亀山 千広 杉尾 敦弘	岡田 恵和	萩原 聖人 木村 拓哉
1995/4	僕らに愛を！	大多 亮 小岩井宏悦	西荻 弓絵	江口 洋介 鈴木 杏樹
1995/7	いつかまた逢える	大多 亮 小岩井宏悦	水橋文美江	福山 雅治 桜井 幸子
1995/10	まだ恋は始まらない	亀山 千広 杉尾 敦弘	岡田 恵和	小泉今日子 中井 貴一
1996/7	翼をください	塩沢 浩二	坂元 裕二 橋部 敦子	内田 有紀 反町 隆史
1996/10	おいしい関係	小林 義和	野沢 尚 橋部 敦子	中山 美穂 唐沢 寿明
1996	3番テーブルの客	小岩井宏悦	三谷 幸喜	ベンガル 黒田 福美
1997/7/31	世にも奇妙な物語'97 春の特別編 本当に怖い話をあなたは知らない 「私に似た人」	岩田 祐二	橋部 敦子 (私に似た人)	西村 雅彦 安達香代子
1997/4	ギフト	山口 雅俊	飯田 譲治 井上由美子	木村 拓哉 室井 滋
1997/7	月の輝く夜だから	小林 義和	橋部 敦子	江角マキコ 岸谷 五朗
1998/1	DAYS	小林 義和	大石 静	長瀬 智也 金子 賢
1998/4/13	美少女H(プロローグ) 放課後の予感	杉尾 敦弘 原田 泉	国井 桂	緒沢 凜 金子 絵里
1998/4/20	美少女H(第1回) サクラサク...	杉尾 敦弘 原田 泉	近藤てつき	黒坂 真美 田中 千絵
1998/10	眠れる森	喜多 麗子	野沢 尚	中山 美穂 木村 拓哉
1999/4	リップスティック	杉尾 敦弘	野島 伸司	三上 博史 広末 涼子
1999/7	not so パーフェクトラブ！	小岩井宏悦	浅野 妙子	福山 雅治 木村 佳乃
1999/10	危険な関係	山口 雅俊	井上由美子	豊川 悦司 藤原 紀香
2000/1	二千年の恋	小岩井宏悦	藤本 有紀 大森 美香 浅野 妙子 尾崎 将也	中山 美穂 金城 武
2000/4	太陽は沈まない	山口 雅俊	水橋文美江	滝沢 秀明 松雪 泰子
2000/10	涙をふいて	杉尾 敦弘	吉田 紀子 林 宏司	江口 洋介 二宮 和也

局はすべてフジテレビ。